

甲斐 弦氏著『オーウェル紀行』を読む

藤 田 清 次

I

海はにび色に沈み、静まり返っている。雲の切れ間から一か所、日光が縞となって海面に射し、そこだけが魚鱗のように輝いている。大きく四、五キロに開いた入江に、大小四つの島が黙然として並び、漁船らしいものが数隻、その間に点々として浮かんでいた。スコットランド本土の山はその向こうに遠く低く、青黒い曲線を引いている。(第6章)

甲斐 弦氏の『オーウェル紀行』(1983) (近代文芸社刊) は、「六十六歳の老体」に鞭打って、イングランド、スコットランドの各地に、ジョージ・オーウェル (1903—50) の「足跡を追い求め」て、1976年の7月から8月にかけて、カメラとテープレコーダーをたずさえて、歩き廻った時の体験を、主としてメモ風の写生文にまとめ上げた労作である。

ところで、356頁にわたるこの紀行文を読み進めて、157頁、つまり、「島のテレーズ」という表題を持つ第6章の中程に差しかかった時、筆者はそれまで筆者の脳裏を時折去来した一つの印象に、はっきりした形を与えてくれるものに行きついたと思った。それは、上に引用した一節に見出される「大小四つの島が黙然として並び」という字句である。今となっては、もう55年以上も昔のことなので、何一つ確証のない話であるが、筆者が「黙然(もくねん)として」という漢語調の表現を初めて知ったのは、夏目漱石の作品を読んでいた時のことであつたと思う。『オーウェル紀行』の中には、夏目漱石を愛読して得たものが、かなり多く盛られていると筆者は感じている。

夏目漱石といえば、東京大学英文の大先輩であり、また、同学科の最初の日本人教師であったという、比較的稀薄なよしみしか筆者は感じていなかった。ところが、昭和22年の春に、たまたま、熊本の五高の講師を依頼され、今なおその典雅な姿を保っている、赤煉瓦の建物の教壇に立った時、筆者は夏目漱石を強く意識したことを思い出す。周知のことだが、漱石は明治29年4月から36年3月までは、五高教授の身分であった。(五高同窓会会員名簿には、「夏目金之助 教頭心 英」となっている。)

阿蘇高原に生まれた甲斐 弦氏は五高出身である。そして東大英文の卒業生でもある。その上、甲斐 弦氏と漱石とを強く結びつける一つの事実がある。それは、終戦後逸ち早く、漱石への関心を高めるため、東京の桜菊書院が設けた「夏目漱石賞」の第一回受賞者がほかならぬ甲斐 弦氏であるということである。昭和22年の春のある日のことだが、同じく五高講師として出講していた甲斐氏と五高の講師控室で顔が合った時、氏は漱石賞受賞の吉報を筆者に打ち明けてくれたことを懐しく思い出す。

終戦の翌年四月に、熊本商大の前身である語専に赴任した筆者が南国での初めての夏を迎えたある日、授業を終えて、熊本市の町外れの、或るみずぼらしい長屋の一室に押しこめた妻子のもとへ帰る途中、黒髪町の電停に辿りついた時、白いヘルメットに白い麻服をきちんと着た、小柄な甲斐弦氏の姿をそこに見出した。実に13年振りの邂逅であった。氏は、「教職追放」の憂き目に逢いはせぬか、としきりに気にしていた。しかし、その心配も無事解消し、氏は、一時、無線講習所に席をおいてから、昭和22年春からは筆者の勤務校の同僚になられた。昭和24年冬に、筆者は遠い寒冷の地北海道へ去ってしまったが、甲斐氏は同じ職場に踏みとどまり、私塾の面影すら多分に認められた学校の発展育成に尽力され、今日の熊本学園、熊本商大の実現に多大の功績を残された。しかし、甲斐氏の教職のことを述べるのは本稿の意図するところではない。

II

もう一度、漱石の話にもどりたい。第7章「白い壁」の終り近くにある、「次男への手紙」の中で、甲斐氏はこう記している。

家なんか形骸だ。滅びるものは滅びるに任せたがいい。それよりは「行人」を読み、「明暗」を読み、漱石晩年の苦悩を味わったらどうだ。「怪談」を読み、「東の国から」を読み、ヘルンの目に映じた日本を現代のそれと比べて見たらどうだ。

甲斐 弦氏の『オーウェル紀行』に見出される直接的な漱石への言及は、上に引用したものの一個所だけであるが、既に述べたように、氏は漱石の影響を多分に受けている。そして上の引用文に出ているヘルンもまた五高の教師であった。人によっては「ヘルン」と呼んだり、「ハーン」と呼んだりする Lafcadio Hearn (1850—1904) は 1896 年（明治23年）に日本に帰化して自らを小泉八雲と称したが、彼は来日した翌年（明治24年）に五高教師となった。五高同窓会会員名簿には、「Lafcadio Hearn 英〔明治24年〕11.—27.10」となっている。ハーンと言えば、彼の松江中学教師時代の教え子であり、夏目漱石とも親交のあった大谷正信氏〔繞石と号した俳人〕が長年広島高校の教授であったが、筆者は温顔の大谷教授から、ハーンの作品を教室で2年間教わったことを懐しく思い出す。

ところで、甲斐 弦氏の『オーウェル紀行』には、日本の古今の文学者や作品の名が出ている。一茶の名句、高見 順、森 鷗外、正宗白鳥、『雨月物語』、その他が見出される。そして甲斐氏の学歴、職歴から当然予想されることだが、ヨーロッパ文学への言及が多い。カーライル、コウルリッジ、コナンドイル、ジョンソン博士、ワーズワス、ブロンテ姉妹、プーシュキン、スペンダーなどの名やその文章がひんばんに出て来る。そしてイギリス文学に関する限り、甲斐 弦氏の造詣は、氏が散文作家であ

るにも拘らず、イギリスのロマン派詩人の方に傾いているものようだ。イギリス文学の精粹は詩歌であるという定評通りに、イギリス詩人たちに傾倒するのは、英文学専攻者たちが迎へるごく普通のコースではあるが、甲斐氏が後にジョージ・オーウェルという散文作家の研究にかなりの年月を費すことになるという結果を重視する時、イギリスの散文、殊に、イギリス小説への関心の薄さが気になると言えよう。ジョージ・オーウェルがイギリス小説の伝統という大きな流れの中のどのような位地を占めているかという切実な課題は、オーウェル研究者にとって避けて通るわけにはいかないであろう。

III

甲斐氏には、『1930年代の教訓——西欧と日本との思想的落差——』という著作がある。これは甲斐氏の勤務校である熊本商大の研究叢書の一冊として刊行されたものであるが、そのほとんど半分ほどの分量をオーウェル論に当てている。そして大学刊行物という形式をとった著作に、エッセイ風の文章を持ちこんだことを甲斐氏はこう弁明している。

およそ、こうした論文の中に、個人の印象とか経験を持ちこむことは、学究的でないと、非難されるかも知れない。だが、この一篇の中で、私はあえてそれを行おうと思う。なぜなら、文献引用とか綿密な統計、図式化、などと同じ位、私達の日常生活におけるなまの体験、そこからおのずから生れて来る直観とか常識とかいうものは、重要であることを、六十七年間の生活が教えてくれたからである。

この『1930年代の教訓』は、甲斐氏の反共思想や日本のいわゆる「進歩的文化人」たちへの批判の表明の書となっている。そしてこの「反共思想」や進歩的文化人批判は、筆者のこの論評の対象である『オーウェル紀行』の最重要モチーフともなっている。そして『動物農場 (*Animal Farm*)』

(1945) や『1984年 (Nineteen Eighty-Four)』(1949) に盛られた、オーウェルの強烈な反共思想に、甲斐氏は全面的に共鳴している。『オーウェル紀行』の中から、生まの文字を拾って見よう。「共産党の手口がいかにか陰険で悪辣であったか」(p.15),「コミンテルンに操られた共産党の、悪辣、残忍な行動」(p.18),「共産主義の恐ろしさ」(p.115),「共産主義・共産党の実態を知り」(p.207),『『ヴィガン波止場への道』の第二部の現代社会主義者批判。(第一部や第二部の) いずれも一九八二年の今日読んでも少しも色あせていない。色あせるどころか、今の日本の病弊を痛烈に指弾される思いがする。自民党に巣食う腐敗した金権主義者だけでなく、教条主義に凝り固まった社会黨員にも、共産黨員にも、是非読んでもらいたいと思う。』(p.252),「重傷の身で共産党の執拗な追求の手を逃れて」(p.324),「共産党の弾圧」(p.328), など、など。

甲斐 弦氏の強い反共思想は保守色の強い熊本という土地柄によるものであろうか。それとも、甲斐 弦氏の切実な個人的体験の裏付けがあるものであろうか。街中を歩いているだけでも、強烈な郷土色がむんむんと感じられる熊本という土地の半ば生理的な感化のほか、共産思想の温床であり、また、共産思想の鋭鋒に直接的に身をさらすことの多かったアジア大陸での生ま生ましい体験の集積によるのであろうか。旧制高校生だった頃、『共産党宣言』その他を読まされ、また、かなりひんぱんに地下運動への参加を勧められながら、それらに一向に魅力を感じなかった筆者が、後年、たまたま、国立大学の一部局の学生委員会の責任者の任にあったところ、明らかに筆者の地位を根底からくつがえす意図をこめた攻撃に再三身をさらしたことがあるが、筆者は、それでも甲斐氏のように、おおっぴらに反共産党的言辞を口にすることはしない。

IV

昭和8年3月に大学を卒業した甲斐氏が、東京の乙種商業学校の授業嘱託などを経て、佐渡中学校教諭という定職に就いたけれども、いわば、青

雲の志を抱いている熱血の青年であった甲斐氏には、一離島の中学校は充ち足りた職場ではなかった筈である。どのような直接的な勧誘に心動かされたかは、筆者の知り得ないところであるが、甲斐氏は、郷土の先輩 江藤 ^{ちかし} 迥さんから、

この世いつか神世ならざる

葦牙の新しき命今も動けり

と書いた色紙を贈られ、「聖戦」を文字通り信じて、満二十八歳、一振りの備前長船を手に下げて、昭和13年7月に蒙古へ渡っている。甲斐氏は、「私の青春はあの黄土の町で花開き、そして滅びた」とも、「夜もなく昼もなかったあの二年間。荒さん、望月さん、木内さん、小倉さん、岩下さん。ああ、西門近くの馬王廟の蒙古中学校で、生死を共にし苦勞を分け合ったあの人びとは、今どうしているのだろうか。皆が理想に燃え、栄達を願わず、富貴を思わず、ただ百尺地下に埋もれる覚悟でもって、蒙古人青少年の教育に力を注いだ。」とも書いている。そしてイギリスの各地にオーウェルの足跡を追い求めながらも、甲斐氏の意識は絶えず、イギリスの風物に蒙古のそれとの類似を見つけるたびごとに、蒙古をしのび、わが故郷を思い出し、ほとんど、節度を逸した詠嘆と懐古の情にわが身を任せている。『オーウェル紀行』は、もちろん、小説でも、研究書でも、ルポルタージュでもないのだから、著者の主観、詠嘆、感傷、などを受け入れる余地は多分にあると言えそうである。ただ、リアリズムの技法が小説という芸術の部門を、いわば、制覇し切っていたかに思われる、筆者たちの世代において、長年小説制作に並々ならぬ意欲を持ちつづけて来た甲斐氏にとって、この姿勢は、むしろ、驚きに似たものを感じさせる。甲斐氏には、「森川 譲」というペンネームがあり、漱石賞受賞作「ホロゴン」を収録した短篇小説集『女兵』（昭和46年）が東京の五月書房から出ているし、熊本市の故荒木精之氏を中心とする同人雑誌『詩と真実』の同人として、創作の筆を休めたことはなかったと筆者は記憶している。甲斐氏が教職に身

を置きながら一方では小説制作を志すという、いわば、両刀使いの姿勢を取りつづけられたこと自体は、他にも、かなり多くの類似の例があることだし、ここに事新しく取り上げるまでもない。夏目漱石然り、教職ならぬ軍医を本業としていた鷗外然り、阿部知二然り、小島信夫然り、丸谷才一然りである。教職と作家活動は必ずしも両立し得ないものではない。そしてアメリカやイギリスやフランスなどの作家のように、歴大な発行部数や率のよい印税も期待できない日本において、地味な作品を主として制作する作家たちが、筆一本で生計を立てることには、かなりの困難が伴うものようだ。そして甲斐 弦氏のぼあい、もう一つ、熊本という地方都市において作品制作を意図しつつけたという特殊事情が加わって来ている。日本のぼあい、京阪神地方という一大文化圏や、東京への往来が自由にできる近距離の土地など、ごく少数の例外を除けば、日本の地方都市は文筆活動者にとっては不毛地帯でしかない。郷土色が殊のほか強烈な熊本にも、才能豊かな人たちが北九州地方の作家たちと競い合う形で、長年活動をつづけて来ていると聞いているが、現在までのところ、大きな収穫をおさめるには至っていない。

甲斐氏は英文学専攻であるのに、氏の関心が段々と歴史へ移っている。氏自身に直接語らせた。

考えて見ると戦後三十年間、私の関心もまた文学から歴史へ、歴史へと移っている。映画を見、テレビを見、新聞を読み、小説を読み、前大戦を取り扱った部分となると、いつも砂の混じった飯を食わされるような不快感を感じる。(第4章)

これはかなり正直過ぎる、生まの感想であるが、それはさておいて、甲斐氏には『明治十年』(徳間書店)という歴史小説の著作がある。甲斐氏のこの意欲的な著作を筆者はまだ入手していないので、この歴史小説について論評することはできないが、上に引用した甲斐氏の感想を文字通りに受け入れるとすれば、甲斐氏の現在の姿勢、つまり、氏の専門分野である「イ

ギリス文学」と「歴史への関心」との関係を、どのように考えるべきであろうか、という一つの疑問につき当る。この論評の対象となっている『オーウェル紀行』の制作に示されている通りの甲斐氏のイギリス文学への意欲と、「私の関心は文学から歴史へ、歴史へと移っている」という断言調の発言とを、どのように両立させるべきだろうかという素朴な疑問を抱かせると言えよう。甲斐氏の現在の姿勢についての筆者の推測をあえて述べさせてもらえれば、甲斐氏は、やはりイギリス文学を氏が選びそして長年つづけて来た専門分野として尊重しており、そして小説制作の筆も休むことなく進め、そして「文学から歴史へ、歴史へと移っている」関心を持ちつづけていると言えるのであろうか。甲斐氏の関心は、イギリス文学、小説制作、歴史へ、歴史への傾斜、それに教師に強いられる職務、それに日常の公私両面の雑事、など、少くとも五つ以上のことへの対応に分散されていることになろう。このことは、地方在住とか、機会の有無とか、などの諸条件を超えて、もっぱら個人に内在する、エネルギーの集中と継続という至上の課題に直結するものであると言えよう。ただ、ここでいう「歴史へ、歴史へと関心が移っている」という字句は、甲斐氏が日本史上の一大事件である西南戦役を扱った歴史小説『明治十年』の著者であって、この作品に並々ならぬ自負を持っていることの間接的表明であり、さらに、歴史に取材した新作の構想を目下練っているという意味をもこめてのものであろうか。とにかく、『オーウェル紀行』の執筆中のあの段階で、このような歴史への傾斜表明は、今回の力作にそう切実なつながりのある発言とは受け取りにくい、というのが筆者の感想である。そう言えば、筆者にはとてもそれほどの勇氣も正直さも持ち合わせていない発言がところどころ散見される。「私の英語も、読み書きはともかく、話すとなるとすこぶる怪しいものだが」とか、「古稀に近い老教授の感謝の念を行間から読み取って下さい」とか、「哀れ、商大の老教授、孤影悄然として見送りぬ」とか、「何やら自分がオーウェルになって行くような気がする」とか、「下手な英語なんかよりは、俺は本当はこの学生達に、もっともっと正しい日本語を、美しい日本の文学を、日本の伝統を、教えなければいけないのではな

いか——そう思うことがある」とかいう文字は、いささか生ま生まし過ぎると言えよう。甲斐氏は既に、自己の年齢に対するこだわりも、自己の本心吐露を抑制しがちなはじらいをも、すっかり棄て去った境地に到達しているのであろうか。

ところで、上に掲げた断片断片の終りにも見られるように、甲斐 弦氏は「正しい日本語、美しい日本語」に強い関心を持っておられる。甲斐氏の美しい訳文にうっとり聞きほれたという学生たちの感想を、筆者が熊本在任時に、しばしば、耳にしたことを懐しく思い出す。甲斐氏は正しい日本語を駆使している上に、多分、熊本地方の方言らしく思われる用語をも効果的に使っている。例えば、146頁に出ている「潮どまり」という句句は、筆者の手許の国語辞典には収録されていない。昭和20年この方、イギリス文学という本務の遅れを少しなりと取り戻したい、というはかない願望に追われて、日本文学を読むことから、ほとんど、遠ざかっている筆者には、日本語や日本文学を語る資格は皆無に等しいかも知れないが、ただ、甲斐氏の著書を読み進めながら、筆者が懐しく思いつづけたことがある。それは、甲斐氏の文章や言葉遣いには、同じ年代に同じく旧制高校生活を送った者に共通の特徴、更に進んで、同じ三年間同じ教室で同じ教授の講義を聴いた者同志に共通する感覚が読み取られたからである。甲斐 弦氏の著書には、筆者の青春時代を思い出させるものが数限りなくひそんでいる。それに、『オーウェル紀行』には、筆者も同じく在籍していた、昭和五年入学の東大の英吉利文学科の一面を描いてくれている。もちろん、筆者がかつて愛読したことのある、サッカーの『ペンデニス』(1848—50)に活写されているオックスブリッジ大学の面影などには比べるべくもないほど控え目なものではあるが、甲斐氏は、50年前の東大英文の口頭試問の様子、外人教師の授業風景、早くにこの世を去った、愛すべき小型奇人才子と言うべき若江得行君の面影などを、懐しく思い出させてくれる。

甲斐氏には蒙古語の会話を3か月でわが物にしてしまうほどの語学の才能がある。中国語にもかなり通じておられるし、また、フランス語やスペイン語にもある程度通じておられる。甲斐氏はイギリスの各地を歩きなが

ら、大した不自由なしに、自己表現をし、また、話し相手のイギリス人の発言を手際よく聞き取って、異色の『オーウェル紀行』を完成されたことに、かつての同僚でもあった筆者はここに心からの敬意を表明したい。妄言多謝。(1983・10・20)